

昭和65年7月1日 第3種郵便物認可  
平成21年7月1日発行（毎月一回）日発行  
俳句雑誌 沖 第40巻第7号



俳句雑誌[おき]

7  
月号

沖  
発行所

# 強気弱気

能村 研三

## 江東歳時記

五月から四カ月間、月一回の予定で石田波郷記念館のある江東文化センター主催による俳句鑑賞講座を担当している。

初回の講義が終わるのを待って、近くに住んでおられる鈴木良戈さんが、わざわざ激励に来て下さった。文化センターのある砂町には、戦後石田波郷が住んだことがあり、昔「鶴」に所属していた良戈さんは現在もここに住まわれている。

石田波郷記念館を巡りながら、砂町の波郷のことをいろいろ説明していただいたが、館内に展示されている、江東地域の写真は、波郷が書いた『江東歳時記』に収載されている写真であることがわかった。大変興味深かったのが、良戈さんにいるお聞きしたが、『江東歳時記』を持っていないのなら、後で送りましょう」と言ってお下り、二三日後に届いた。

この『江東歳時記』は、昭和三二年から読売新聞江東版に波郷の句と紀行文に写真を添えて一五回連載したものをもとめたものだが、江東区のみならず、墨田、江戸川、葛飾、

風死して斜め走りのオートバイ

朴の花詠みし系譜に父の名も

曝涼や目打紙繕りの直筆稿

丁寧が仇となりたる薄暑かな

退路なき成業ありて半夏生

四駆車の茅花月夜を直走す

暑に向かふ強気弱気の波が来て

終ひなれど一律減の夏期手当

くらたけん氏を悼む

伏すもなく青梅雨を疾く消えしかな

献身もボランテイヤも尽き梅雨寒し

※一部「俳句」七月号と重複

足立の各区の季節の風物、行事、産業をつぶさに題材としている。この江東五区は私が住む市川と隣接しているので、現在とは違った昭和の記録としても楽しめる。

波郷は写真マニアでもあったので、ローライやライカといったカメラを持っていて、波郷自身が撮影したものもあると言う。

『江東歳時記』にある夏の句をいくつか紹介する。

俳句研三

時計工いつせいに退けて梅雨上る  
お化け煙突隠れつ現れつヨットの帆  
青楓の風をかざして布海苔干し

『江東歳時記』は、正に今から五十年前の風物を今に伝えてくれるものである。

現在私たちは何人かの俳人とアロの写真家とのコラボレーションで、失われゆく市川の風景を「撮って」「詠んで」記録する「市川俳見」の仕事にも大変参考になるものであった。

能村 研三



# 蒼茫集



水芭蕉

柴田雪路

三河

吉田政江

花衣すたとんと脱ぎて癒え近し  
月を得て露地にさざめく雪柳  
卯月来る五風十雨の世に遠く  
さざめきは水の序の舞水芭蕉  
土地訛茅花流しに攫はるる  
ラベンダー逢ひたき人をひそと待つ

若布刈鎌

松本圭司

黒潮にみがかれし艶若布刈鎌  
鯉幟立つやたちまち風生まる  
粗挽きの胡椒が鼻をついて夏  
飛ぶことを夢見てをりぬ羽抜鶏  
螢火に鋼のごとき闇のあり  
昭和の日ニュース映画に雨が降る

もののふの濃き地三河の八重桜  
松さくら師碑に錆朱の深みかな  
藤房の靈気次第に降りにけり  
紙飛行機雀がくれに躓けり  
花鳥賊や札糶てふは静かなり  
筑波嶺の裾にござらせて霜くすべ

ニュートラル

北川英子

聖五月内から卵つつく音  
風生る雨後の新樹の身ぶるひに  
海か山決めてよ初夏のニュートラル  
崩れたる牡丹百片筏とす  
浮巢見の暁の舟音殺しをり  
老境や引き潮どきも卵波立ち

地下茶房 千田百里

牛の仔の鼻輪もらひし聖五月  
ホームズの呪縛を断ちて更衣  
地下茶房に黄昏はなし桜桃忌  
祭終へ鳳凰しばし星に帰る  
里山を出づる万緑湿りして  
飴いろの落暉炎となり夏は来ぬ

友情 辻美奈子

天道虫と友情を確かめあふ  
てふてふが過ぎぬ時差式信号機  
いもうとの風船ちよつと羨まし  
蛇衣を脱ぐ思春期にまだ遠く  
反骨のたましひ立てり蝮草  
からのゑんどう野は微熱帯びてゐし

荷風以後 秋葉雅治

蒼天をまるごと招き田水張る  
竹皮をぬぐや次つぎ子の別居

稜線に白のひと刷毛風かをる  
荷風以後をとこは持たず黒日傘  
列柱なすパイプオルガン聖五月  
甚平や子育て終へし膝がしら

ちちは松 荒井千佐代

春果ての洞くろぐろと大櫛  
若葉に雨や飯粒で封をして  
石鹼を洗ふ日もあり花ミモザ  
あつさりと雨の上がりし蛇の衣  
早乙女へ灘の荒波ひびきをり  
ちちは松すらりとははの百日紅

道一本 柴崎英子

神火とも業火とも野火猛るなり  
蘆焼いて村ひつそりとありにけり  
時しも花吹雪先師の声とこそ  
花吹雪浴び来し夜の微熱とも  
味噌蔵の樽の膨らみ夏兆す  
道一本空へじやがいの花盛り

塩味 辻直美

さくらがひ霊長類に頭蓋骨  
皐月かな一年といふ喪の底ひ  
婚の夜も葬りの朝も五月にて  
剪定やかちかち山の薪積み  
噴水の芯も飛沫も捨身なる  
豆飯や塩味ほどの親の役

三河黒松 遠藤真砂明

岡崎二句

三河黒松直立の夏隣り  
味噌桶の箍に暮春の締め力  
ちりちりとちりめんじやこや日がちぢれ  
雨脚のさみどり走り子供の日  
沖漬けの螢鳥賊とや屋台酒  
母の日や海女に一日の風休み

万緑 吉田陽代

百千鳥日にぬくもりし梢かな  
逝きて三とせの夫にも仲間春の星

反対ホームの人の談笑夏来る  
師のことばいまも新し緑立つ  
万緑の中の師の忌や師のことば  
芍薬の白光を今見届けし

ふるさとの橋 望月晴美

中天に城をとどめし暮春かな  
春霞ふるさとの橋かけ替り  
春の雨ひとりに点す絵蠟燭  
紅顔の阿修羅像みて春惜しむ  
朴一花待ちぬしごとく空青し  
父の忌や雨に有情の白菖蒲

象のまなこ 千田敬

五月来る象のまなこの皺ぐるみ  
御名御璽知らぬ妻なり昭和の日  
阿修羅像見て汗ばむ人の修羅の渦  
阿修羅の前わが胸中に卯浪立つ  
鐘楼に物語あり夏の月  
鳩居堂より香のほのかに街薄暑

殺し文句 菅谷たけし

四月尽味噌蔵百の穴太積  
春闌けるおどけ羅漢が句碑守りて  
囀りに殺し文句のありしやも  
毛虫焼く不退転てふ頬かぶり  
美しく雨を弾いて毛虫這ふ  
肩上げのとれて浴衣の柄合へり

清和の天 渡辺 昭

一雷のあとの風音青葉冷  
清和かな今もここに先師の訓  
汐木負ふ独りに夕べ卯浪立ち  
溪若葉滝となりたき水逸り  
落し文手種に拾ひ旅愁なほ  
檜山の裾を巡りて青き踏む

余花の雨 鈴木良 戈

風染めて山裾に展ぶ芝桜

ふらここの吸はるまほらの青空へ  
ぜんまいの長けてのの字のほどけけり  
深川の寺町通り余花の雨  
瞬目の煙る一生更衣

瑞 鳥 大畑善昭

岩山  
瑞鳥の飛翔と見せて残る雪  
野のすみれ師と歩きたる日も遠く  
さみどりを来る長身の娘婿  
父方の祖父母も見えて端午かな  
山の子のときめき山につつじ咲く  
その遺児の悲しみ思へば花なづな

天 空 上谷昌憲

天空に鉄接ぐ火花青葉冷  
漢字すぐ忘るるつつじ眩しめり  
「初めてのお使い」らしき夏帽子  
ががんばやいつも何かに追はれぬて  
蒟蒻を炒めて鳴かすみどりの夜

# 潮鳴集



管弦の日

大森春子

管弦の音は聞えず 蜃気楼  
パンの耳切り落したる 謝肉祭  
位牌堂出でてまぶしき松の芯  
実朝の海へ立夏の帆を張れり  
キーパーの跳ぶや五月を鷺掴み

何よりも

藤井みち子

何よりも 風見ゆる 席夏料理  
袖口のはしやいでをりぬアロハシャツ  
ぐいと反る背泳ぎの空青ければ  
沼もはや見えず 青葙楯となり  
熊楠の紀の国あをし滴れる

易々と

古屋

元

吊革の丸き海ゆれ 夏帽子  
灰皿に消しゴムひとつ 明易し  
葉桜のざわめく 人事丸の内  
噴水の三人それぞれ 視線  
易々と 空中に住み 更衣

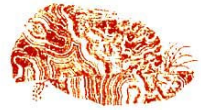
焰を持たぬ

林昭太郎

花曇りコピ―百枚まだ 温く  
回りつつ 歪み正してしや ばん玉  
葉桜や 焰を持たぬ 調理器具  
足裏に敷居ひんやり けふ 立夏  
薫風や 釦の数のボタン 穴



# 沖作品



## 能村研三選

朝礼の五月の言葉透きとほる

東京

七種 年男

折々に三河訛の春菜売り

流氷船光砕ける音のして

節目とは歩き出すこと竹の秋

惜春のブレーキを踏む九十九折

後ろ手は働く形麦を踏む

舞殿の巫女の冠風光る

麦秋の一色空と分かち合ふ

鞆に座し考へる人となる

釣人が釣りの見物亀鳴けり

あたたかや納屋に蚕棚と父の椅子

聖時鐘の高きを渡る牧びらき

荒東風へ干すジーパンの逆さ吊り

黒塀の木目涼しき蔵通り

藤波に酔うて瀬音を遠ざける

愛知

近藤 敏子

神奈川県

福島 茂

補助輪をはずす練習松の芯

千葉

井原 美鳥

父の日のオイルのまはるフライパン

二番星菜殻火小さくなりけり

羽抜鳥雨がひなたを通りけり

あかときをもつて満願の羽化

稿つつむ絹の風呂敷花の雨

「抜けられます」路地に張り紙荷風の忌

葉ざくらや心療内科の固き椅子

万緑や砂場に子らの未来都市

銀河系その一坪に茄子植うる

山桜桃ひとつのひかりひとつのかげ

酒乱原因離婚再婚昭和の日

腕時計に昨日の疲れ聖五月

茹で上げる湯気にも青み菘碗豆

清志郎逝く首夏みんなの分君の分

愛媛

玉井江吏香

東京

藤原はる美

# 作品 15句選評

\*  
能村研三

朝礼の五月の言言葉透きとほる

七種 年男

この句に詠まれた朝礼は、学校の全校朝礼で校庭に全校児童生徒が集合し校長先生がお話をしている状況であろう。四月は希望に溢れた新年度がスタートし、先生も生徒もお互いに緊張の連続であったが、五月になると校庭に咲いていた桜もすっかり若葉となつて落ち着きを取り戻した。若葉を背景にして校長先生の言葉の一つ一つが透き通りさわやかな感じで伝わってきた。私も中学高校と六年間市川学園に通つたが、この六年間の朝礼は校長先生が高齢で体調を崩していた時期でもあったので、教頭であった父の話を生徒の一人として聞いた。何か照れくさいものがあった、この時間が来るのが嫌いであった。話題となるネタも家族の団樂の時の続きのような時もあった。

後ろ手は働く形麦を踏む

福島 茂

麦踏みは春浅い季節に行く。今の時代はほとんど機械で行うようになってしまったが、昔は後ろ手に組んだ姿勢での単調な仕事で、その淡彩の風景は絵画や詩歌にもよく描かれた。風の冷たさ、光の明るさ、そして麦の芽が伸びようとする力とそれを抑え込もうとする力。踏み付けにすることによって育てると

いう逆説的な意味合いは何か人生に通じるものがある。後ろ手に組まれた手は実際は無用であるのだが、ここでは「働く形」として表現された。

あたたかや納屋に蚕棚と父の椅子

近藤 敏子

養蚕は幕末から昭和初期にかけて全盛期を迎えた。私も飛騨の白川郷の合掌造りの古民家などで、蚕棚を見たことがあるが、昔は蚕の季節になると、客間を除いてどの部屋にも蚕棚が所せましと置かれ、時間毎に桑の葉を与える仕事で忙しかったと言ふ。蚕棚は角材を組んで作ったもので、養蚕籠を入れるのに使つた。蚕の時期が終わると、豊んで納屋などにしまった。その納屋には父がかつて愛用していた椅子がまだ遺されていてなつかしかった。

羽抜鳥雨がひなたを通りけり

井原 美鳥

夏の初め、日が照っているのに降る雨のことを日照雨（そばえ）というが、名詞として表現するのではなく、「雨がひなたを通る」という一つの動きにしたのが面白い。「そばえ」とはふざけること戯れることの雅語であるが、晴れ渡る空の下、振り続ける不思議な雨を人は天の戯れと呼んだのかも知れない。そこへ羽抜鳥を配合した意外性も面白い。鳥類の羽は六月頃に抜けかわる。この羽抜鳥は羽が抜け鳥肌をあらわにした鶏のこと、みずばらしく哀れでもある。

万緑や砂場に子らの未来都市

藤原はる美

万緑という季語を一番最初に使つたのは中村草田男であるのはよく知られていることだが、若々しい季語である。砂場で遊ぶ子供たちは無限の可能性を秘めて未来都市を描こうと砂で創造を膨らませている。これを温かく見守る作者の眼もやさしい。